



Title	瞻仰微言
Author(s)	田中, 吉太郎
Citation	懐徳. 1929, 7, p. 81-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編者云、今年初夏、今上陛下大阪行幸に際して、本會々員中拜謁の光榮に浴した事を喜ぶの餘り、各々一篇の所感を寄せられたが、紙數の都合で左の四君のものだけを収めることにした、原諒を乞ふ。

○瞻仰微言

田中吉太郎

今回の行幸に當り一布衣たる野生が、社會教育功勞者といふ廉を以て、特に拜謁の光榮に浴したるは、望外の幸で、唯々恐懼措く能はぬ所である。

聖上陛下昨秋舊都に即位の大典を挙げさせられ、行在數旬、吾が大阪則ち指顧の隣都たる故を以て市民は皆崇嚴極りなき鹵簿を奉拜し、今尙印象深きものがある。されば、本年若し行幸仰せ出されんか、舊都を距る程遠き東北の地か或は西南遙かなる皇土なるべきを期待して居つた。然るに豊圖らんや重ねて關西の地、而も大阪府に蹕を駐めさせ給はんとは、天恩優握。あゝこれ果して何の來由する所ありや、唯々大御心を拜し奉り、其の寵光の厚きに感泣するの外はない。謹んで按ずるに今回の行幸には、頗る意義深きものがあらねばならぬ。往昔大嘗祭の行はせらるゝや、其翌年には必ず浪速の地に於て、八十島

祭といふ神事が挙げさせらるゝを恒例とした、蓋し即位の大典は天神を奉祀する祭事に屬するから八十島祭によりて國土生成の地祇を祭り奉らんとする大儀によりしものと思はる、文献に徴するに、八十島祭は文徳天皇の嘉祥三年から四條天皇の御代に至る前後四百年間であるが、この祭の濫觴に至りては、遯く神代に起源せる事は確かである。其祭典の主旨は、吾が大和民族の理想を表現したるものと言ひ得るのである、たゞ其の末期に至りては佛教の風俗が混入して、當初の精神を没却したる跡でもあるが、八十島祭の祭事は精神的にもまた實質的にも、豊蘆原瑞穂なる邦土の天恵を崇敬したるもので、往昔の浪速群島は其の縮圖で祭事の對象とした。今より千數百年前、現大阪城頭の高臺あたりから、西北より西南方面の海洋に點々羅列せる諸島嶼を鳥瞰し、これを大八島に鎮ります諸の地祇と仰ぎ奉りて、高く祭壇を設け神事を嚴修したる光景の雄大さと崇高さは、今より想像だに出來ぬ程であつたであらう。この國土生成の神徳を崇め奉る意義を、最も明瞭ならしむる爲に、大古より二柱の神格に大別

されて居る。即ち生島祭と足島祭と稱する主神である、生島とは生魂洲、足島とは足魂洲の事で、之れを現代的に譯すると、人間繁榮の主神と生産豊饒の主神とである、更に之れを要約すると、民族繁榮と國産豊富とを祈願する祭儀である、皇祖皇宗の昔より、傳統したる高遠美妙の理想として、民力の涵養と財政の充實とを圖り、國民の和平と其の福祉とを祈願させられたる大古の行事は、文化の今日に於ても、教化の爲め心あるもの、憧憬としてやまぬ所である。明治、大正、昭和の聖代は建國の精神に基き、國粹保存、古典復興の期である。希くば大典已修の翌年なる此の機會に於て、八十島祭の復活によりて大古の醇朴を宣べ、思想淨化に努めんとする事は何人も切望して已まざる處であらう。

畏くも今回行府の聖旨を按ずるに、第一は青年を親閲せらるゝ事と、第二は産業を奨励せらるゝ事とである。陛下登極に先ち令旨を賜ひ、國運進展の基礎を青年に置かせられ、青年は則ち國民の精粹で、國家の生命である旨を訓示し給ふた、今其の青年の代表十萬を青雲たなびく城東の野に親閲せられ、奉

公の大義を喚起し給ひたるは、全く生島祭の古精神に合致せるものにて、侍従を各種産業施設に派遣せられしは、全く足島祭の神事と何等軒輕なき事を看取する事が出来る。只、祭政時代と法治時代と其の形式を異にせるに過ぎぬ。

陛下曠世の大業を建てさせらるゝに、皇宗の威烈を不基とせられ、普く神靈の降臨に對へさせらるゝ勅教歴々たるものがある。陛下は常住不斷國利民福のため、神に祈願したまふものにして敬神尊祖の聖慮凜然たる詢に恐懼に堪へぬ所である。我等は今回の行幸を瞻仰し、其の精神に於て八十島祭の復興であると云ふ事を認識せざるを得ない、而して吾が大阪市は、民力に於ても産業に於ても、實に全國の中樞である所以を自覺し、市民の將來の負荷の重大なる感奮興起せなければならぬ事を高唱し、虔んで聖慮の高大無邊なるに感激する次第である。

○所 感

阪 田 廣 吉

今上陛下關西に行幸あらせられて、私は一層緊張味